

おじいちゃん、戦争って？

小5の自由研究、本に

戦後70年

小学5年生の男児が、祖父の戦争体験を聞き取った夏休みの自由研究が一冊の本になった。特攻兵を送り出したり、終戦を知らずにジャングルで逃げ回ったりした祖父との率直なやりとりを通じて、戦争の悲惨さを伝えている。

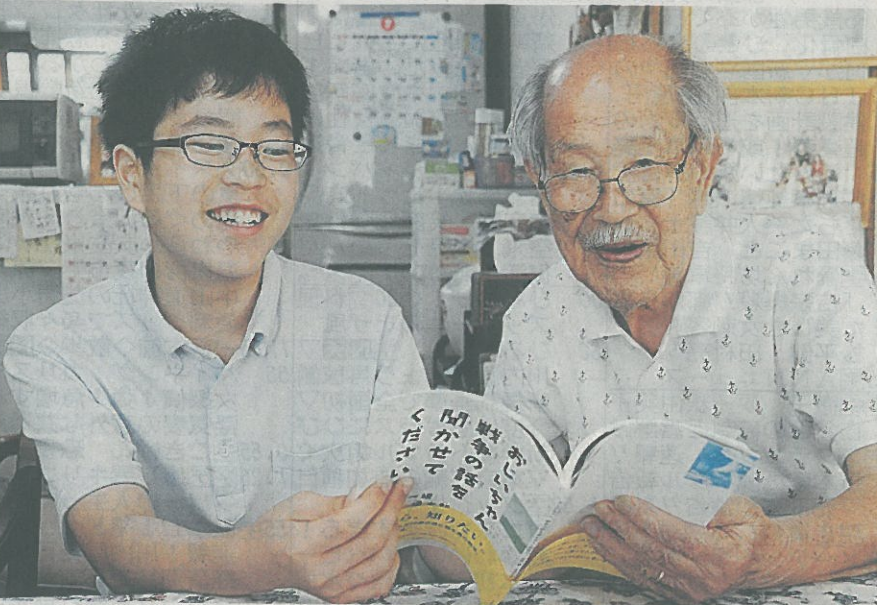
ルソンの惨状聞き取り

今は中学3年生になった名古屋市名東区の八木湧太郎君(14)。2011年夏、自由研究のテーマに頭を悩ませ、愛知県豊田市に住む祖父の進さん(94)を訪ね、「おじいちゃん、戦争の話をお聞かせください」とお願いした。その言葉が自由研究と書籍のタイトルになった。

湧太郎君は耳が遠くなった

終戦は11月

おじいちゃんから聞いて、じつは11月15日の終戦を知った。おじいちゃんも、戦争は11月15日だった。おじいちゃんも、戦争は11月15日だった。おじいちゃんも、戦争は11月15日だった。



た進さんの隣に座り、耳元で大きな声で質問を繰り返した。進さんは「あんまり思い出したくない」と思っていたが、「一生懸命聞いてくるもんで、話してしまっただ」と笑う。自由研究は2人の会話形式で進む。

湧 おじいちゃん、どうやって軍隊に入ったの？

進 20歳になると男は全員が徴兵検査を受けるんだ。進さんは1943年、象隊員としてフィリピンのルソン島へ。天気図を作り、パイロットに天気を教えるのが仕事だった。

44年10月、ルソン島の南に位置するレイテ島に米軍が上陸すると、特攻が始まった。進さんは複雑な思いで、特攻兵に行き先の天気を教えた。「無事目的を達してほしいとの思いと気の毒さが入り交じった気持ちだった」

湧 アメリカはどんどん攻めてきたの？

進 (45年1月にルソン島に上陸してきたので) 山へ逃げることにした

野戦補充隊に組み込まれた進さんは、重機関銃で進軍する米軍に応戦した。しかし、次々と陣地を奪われて部隊は壊滅状態に。栄養失調で倒れていく仲間に、「いつか自分も」と覚悟しながらも、ナメクジやミミシ

べて生き延びた。

湧 8月15日が終戦記念日だけど、その時は何をしていたの？

進 ぜんぜん知らなかった

11月末にフィリピン軍人らに見つかり、ようやく日本の敗戦を知った。「頑張っていたら日本軍が勢いを盛り返すはず」と信じていただけに衝撃だった。米軍の捕虜になり、46年12月末に日本に戻った。野戦補充隊員と一緒に帰国できたのはわずか6人だった。

自由研究は、進さんが米軍の捕虜収容所で知り合った市古爾亮さん(故人)が描いた挿絵も盛り込み、その後の祖父との手紙のやり取りで締めくくった。

「もしおじいちゃんが死んでいたら、ぼくは生まれてこられませんでした。本当に感謝しています」

進さんはこう返事を書いた。「戦争はぜったい、しないことです。戦争はしないで、上手に解決することが一番いい」

自由研究は、自宅近くの「戦争と平和の資料館ピースあいち」で展示されて話題になり、出版につながった。編集企画室群刊でA5版64頁、税別1千円。問い合わせは同社(0522・589・2771)へ。

上 出版された本を読む孫の八木湧太郎君と祖父の進さん。愛知県豊田市。下 「おじいちゃん、戦争の話をお聞かせ